

## [体育・保健体育]

## 進んでコミュニケーションを取り合おうとする児童の育成

## - 「習得-活用-探求」型学習スタイルを活用したリズムダンスの実践 -

古川 康成\*

## 1 はじめに

平成20年1月の中央教育審議会答申では、体育科・保健体育科に関する答申文の前段部分で、「体育科、保健体育科については、その課題をふまえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、改善を図る」と改善の基本方針が述べられている。その改善点の基本方針の一つに「指導内容の明確化を図る」ことが挙げられている。指導内容の明確化とは子どもたちに身に付けさせたい動きや取り組み方をより具体的に示したもので、これまである程度学校に任せられていた指導内容が発達段階に応じてより細かく明示されるようになった。特に運動の技能面や思考・判断の内容に具体的に表れているといえる。この改善の背景にはいわゆる「めあて学習」の問題点が浮き彫りになってきた事実があると思われる。これまでの体育学習は、「自己学習能力を育てる」観点から個人の能力や興味・関心に応じて課題を選択したり、設定したりする「めあて学習」を中心に学習を進めてきた。しかし、個々の子どもたちの現在もっている能力に基づいて自由に課題を選択させ、学習するだけでは、運動の基礎・基本の習得はおろか、継続的な楽しさや学習の深まり、子ども同士の学び合いの質の高まりをすべての児童に期待することは難しい。それ故に「その課題」である、「子どもの体力低下」や「運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例」が生じた理由はこれまでの体育学習の学習スタイルである、「めあて学習」が一因であるといえる。そのような問題点に踏み込んだ新しい学習スタイルを中央教育審議会が提案している。それは、「習得-活用-探求」型学習スタイルである。新学習指導要領に基づく学習の方向を示しているこのスタイルは今後、教科によってさまざまな解釈が行われるであろう。体を動かす活動が中心の体育学習は静的なイメージのある探求活動には不向きであるという意見もある。しかし、体育学習にもかかわらず学習の高まりを実現した多くの実践があり、「習得-活用-探求」型授業もそのスタイルの一つであるともいえる。学習における具体的にとらえとしては、各種の運動の基礎的な動きが「習得」となり、習得した内容を集約、拡散することで仲間、グループの「活用」へとつながる。それは、「習得」のさらなる定着と「活用」の発展にもつながることも考えられる。また、「活用」の発展は個人、グループの枠を超え、全体的な「探求」的な活動にもつながる可能性があるとともに、「活用」や「習得」の定着を促進する役割もある。このように、「習得」、「活用」、「探求」それぞれが相互にリンクし、その上に技能、態度、思考・判断がバランスよく組み合わせられて新しい学習スタイルとなる。

しかし、ただ学習の過程を工夫するだけではねらいを達成するのは難しい。学習の高まりとは互いの意思の疎通があって成り立つものである。習得した内容が広まり活用され、活用する中で新たな考えが出されさらなる探求につながることは多くの実践者がこれまでの体育学習から経験していることである。意思の疎通とはいわゆる児童相互のコミュニケーションである。児童の発達段階や運動能力・意欲には個々の違いがある。違いとは個性であり、コミュニケーションをとることでお互いの個性の尊重にもつながっていくと考える。

## 2 主題設定の理由

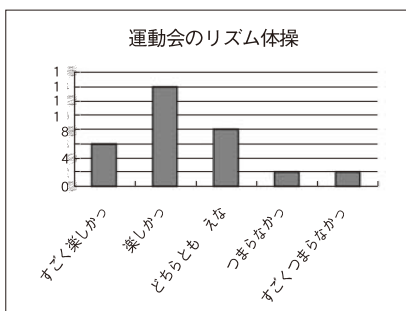
## (1) 児童の実態から

4年生、男子19名女子13名、計32名の学級である。体力テストではほとんどの種目において全国平均を上回り、運動に対する意欲も高い。体育学習に関しては好んで取り組む児童が多い反面、運動に対する苦手意識から体育の学習を休みがちな児童も数名見られる。ボール運動などのチーム競技は得意な児童だけが積極的に取り組み、女子を中心にゲー

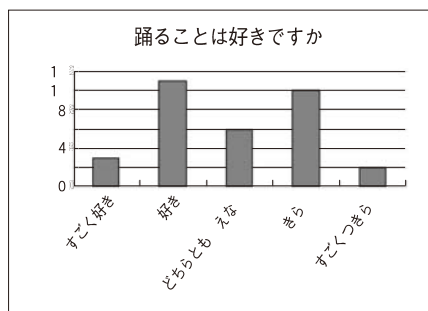
\* 小千谷市立東小千谷小学校

ムに積極的にかかわろうとしない状況が見られ、作戦タイムなどでも活発な話し合いが見られない。

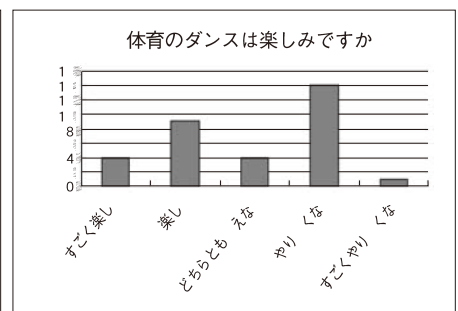
表現運動の取組として児童はこれまで体育の時間の表現リズム遊びや、運動会の準備運動としてのリズム体操、地元の民謡に合わせた集団での踊りを行ってきた。運動会の時期には休み時間のたびにリズム体操の曲を流し、グループで積極的に踊る姿が各教室で見られた。運動会のリズム体操について聞くとほとんどの児童が「すごく楽しい」「楽しい」と答えているなど、(表1) 踊ることについて好意的に捉えているといえる。(表2) しかし、体育授業でのダンスについては、体育学習に取り入れることに拒否感を示す児童が多かった。(表3) 具体的な理由として「集団活動よりも個人活動が好き」、「覚えたり、考えたりするのが難しい」、「競争する楽しみがない」、「何をするかよくわからない」などが挙げられた。また、ほとんどの児童が、ダンスについて「教えられた踊りを覚えてまちがえないように踊らなければならない」と考えており「自分たちで踊りを考える創る」ことまでは意識が高まっていないことが話し合いの中で明らかになった。このように、児童にとってはリズムダンスはダンス経験の乏しさやこれまでに獲得した運動技能を生かす場面が少ないなどの理由から、自己課題を設定しにくく、学びの深まりが得られにくい学習といえる。そのような実態において、コミュニケーションがとりやすいリズムダンスをテーマに設定した。



(表1)



(表2)



(表3)

## (2) リズムダンスの特性から

### ① リズムダンスの一般的特性と系統

「リズムダンス」は表現運動の一つで、ロックやサンバ、ヒップホップなどの軽快なリズムに乗って踊りながらみんながダンスを楽しむ運動である。さらに音楽に合わせて自由に動きを創造することができる発展的な活動が可能な単元である。音楽に合わせてリズムの取り方や動きを工夫したり、相手と自由にかかり合って踊る楽しさがある。競争、克服、達成が主なねらいである他の運動領域とは違い、決まった動きがなく、リズムに合わせて踊る自由度が高い運動である。しかし、自由度が高いという良さがある一方で、ある程度の動きを提示しないと、どのように踊ったらよいか戸惑うこともある。体ほぐしの運動とも関連しており、また、その他いろいろな活動でもリズムダンスの導入が考えられ、態度面での向上が期待できる。中学校以後は現代的なリズムのダンスに発展する。

### ② 子どもから見た運動の特性

リズムに乗って弾んだり、回ったり、スキップしたりして自由に踊ることで、心と体が弾む感覚を味わうことができる運動である。さらに友達と協力して活動したり、教え合ったりすることで自分や友達のよさに気づき、友達との交流を深めることにつながる運動でもある。マイナス面としては、「見られている」という意識を強く感じる運動のため羞恥心が生じやすく、自分の思いを表出することに抵抗感を感じやすいことが挙げられる。

これまで児童が体験してきた表現運動は決まった踊り方を覚え発表する活動が中心で、リズムに合わせて自ら踊りを創作したり、その動きを組み合わせる作品を作ったりという能動的な学習は一部の児童にとどまっていた。リズムダンスは友達とコミュニケーションをとり合いながら創り、踊ることで、ダンスの楽しさを深め、より多くの友達に広げることが期待できる運動である。仲間とかかわりながら自由に踊ることで、進んでコミュニケーションをとろうとする児童の育成を目指していく。

## 3 研究の目的

本研究の目的は、リズムダンスの学習において、「習得」「活用」「探求」の内容を明確にしたうえで、児童が積極的にコミュニケーションをとり合い、ダンスを創り上げていく過程で、どのような場面が有効であったかについて検証するものである。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 「習得—活用—探求」の系統化と相互リンク（研究内容1）

リズムダンスにおける「習得」「活用」「探求」のそれぞれの学習内容を整理し、指導計画を作成する。個人のダンスの質が高まったら、一つの曲をとおして、グループでリズムダンスを完成させる（探求）。児童相互の動きの蓄積（習得）を持ち寄り、組み合わせる（活用）ことで独創的なダンスができると考える。曲の繰り返し部分では同じ踊りにならないよう、基本の踊りにさらにアクセントを加える（活用）ことで踊りの世界が広がると考える。こうした一連の流れでお互いに創り上げた動きを生かしながら踊りを創って楽しませたい。また、この3つの活動は相互に関連し合っただけでなく、個々及びグループの力を伸ばしていくものである。習得した技能の活用がさらなる技能の定着や高まりにつながり、また、探求的な活動が技能の定着や活用の促進につながっていくと考える。

	「習得」	「活用」	「探求」
内容	ねらいを達成する根拠となる基礎的な技能	習得した技能を用いる運動	習得、活用した運動をもとにした思考の進め方、新たな運動
学習前の児童	○既習の知識・技能 ・運動会のリズム体操や郷土に伝わる踊りを集団で踊る。 ・弾む、回る、ねじる、スキップなどの動き。	○学習の活用内容 ・リズムに乗って即興的に自由に踊る。 ・友達と手をつないで踊ったり、友達のまねをしたりして踊る。	○探求的な活動 ・楽しく踊るための動きを選ぶ。 ・友達のよい動きを見付ける。 ・リズムにあった動きを選んだり見つけたりする。
指導法の工夫	①既習のリズム体操にどのような動きがあるか確認し、図に表す。 ②確認した動きをもとに、「体のくずし」「リズムのくずし」を加え、新たな動きを作り蓄積する。 ③新たな「くずし」を入れて踊っている子どもを紹介し、動きの模倣を行い、動きの種類を増やす。	①踊る曲は子どもたちの希望を取り入れながらロック、サンバなどいくつかのジャンルに分け、提示する。 ②踊りたい曲に合わせて流動的なグループを構成し、活動できるよう工夫する。 ③選出した曲を16時間ずつ区切った歌詞カードを提示し、踊りを組み合わせる手立てとする。	①毎時間終了後、学習カードで自分の動きや気付きなどを振り返り、次時の課題を設定する手立てとする。 ②一つの曲で踊りをみんなで創作する。「踊る—創る—見合う」の活動を繰り返すことで、動きに対する子どもの意欲面、技能面を高める。 ③楽器や小道具を提示し、踊りの工夫を考えさせる。
育てたい児童の姿	◎新たに習得する技能 ・ <u>お互いを見合いながらリズムに乗って弾む、スキップ、移動するなど全身で踊る。</u> （個人） ・ <u>教師や友達のまねをしながらアクセントやリズムの変化を付けて踊る。</u> （個人・グループ）	◎習得したことの活用 ・ <u>いろいろな曲調の曲に合わせて動きやリズムの取り方を工夫して踊る。</u> （個人） ・ <u>踊りたい曲に合わせて友達とかかわり合っ</u> て自由に踊る。（グループ） ・ <u>グループで意見を出し合いながら新しい動きを創る。</u> （グループ）	◎探求的な活動 ・ <u>自己の能力に適したダンスの課題を見付ける。</u> （個人） ・ <u>いろいろな動きを出し合い、評価しながら活動する。</u> （グループ） ・ <u>練習や発表の仕方を工夫する。</u> （グループ） ・ <u>他のグループのダンスについて感想を述べる。</u> （グループ・個人）
活動のねらい：リズムに乗って友達と一緒に踊る楽しさや喜びを味わう。			

表4 本単元において育てたい児童の姿と指導法の工夫 ※下線部はかかわり合う場面

### (2) コミュニケーションを活発にする手立てと抽出児の動きやかかわり方の分析（研究内容2）

事前アンケートやグループ化するまでの運動実態から、2グループの中で「活動意欲が高く、積極的に踊りを考えている」、「運動能力は高いがダンスへの意欲面で劣る」、「運動能力が低く、取組も消極的である」児童を1名ずつ、計6名抽出する。以下の手立てを施し、グループ化した3時間目以降の抽出児の活動の様子やかかわり方を分析し、その変容を探る。

#### ① 学習形態の工夫

一人で踊ることが恥ずかしいと感じている児童には、2、3時のめあて1の活動では2人組で踊る。また、めあて2では流動的なグループを構成し、活動することで安心感をもたせられると考える。

#### ② 単元構成と授業展開の工夫

単元の導入はゲストティーチャーを招いて子どもたちと一緒に踊る楽しさを味わわせ、「踊ることは楽しい」という動機

付けを行う。2, 3時まではめあて1→めあて2を繰り返すステージ型の学習活動で構成する。めあて1ではロック、サンバなどで構成する4曲メドレーを取り入れ、十分弾んで自由な踊りに慣れさせる。めあて2ではメドレーから1曲選択しその曲の特徴を生かしたのり方を工夫して、友達と自由に楽しむ。4～6時の活動は一つの曲の踊りをみんなで話し合いながら創作することが中心となる。毎時間、「おどるー見合うー改善する」の活動を繰り返すことにより、コミュニケーション能力が高まると考える。最終時は「ダンスパーティーを開こう」と銘打ち、ゲストティーチャーを再び招いて子ども主催の発表会を行うなど、単元の最後まで意欲的に取り組めるよう工夫する。

③ 導入は体ほぐしの運動で

2時以降の毎時間の導入として体ほぐしの運動を取り入れる。主に交流をねらいとした内容を行い、ふれあう、楽しむ活動を中心に、これから体を動かして踊ろうという気持ちを高めていけるよう支援する。

④ リーダーを中心としたグループ学習

動きが思いつかない、イメージがわからないという児童には、ダンスが得意な子どもにリーダーになってもらい、リーダーの模倣をする活動を行う。このことによりいろいろな動きを身につけていくとともに自ら新しい動きを生み出すことができる。また、動きが思いつかないグループにはこれまでのダンスの動きなどを振り返らせて教師が具体的な動き作りのアドバイスをする。

5 研究の実際

(1) 単元構想 単元計画 (全7時間)

時	1	2	3	4～6	7
0	◎オリエンテーション	○体ほぐしをする。			
5	○体ほぐしをする。	めあて1 いろいろな曲のリズムにのって楽しく踊りながら自分の表現を探す。		めあて2 1つの曲でグループで創作したダンスを楽しむ。	◎ダンスパーティー
	○ゲスト・ティーチャーを招きリズムダンスを一緒に行う。	○曲調の違う4曲をメドレーで流し、2人組やグループで即興で自由に踊る。 ○おもしろい動きをしていた児童を紹介する。 ○感想を発表する。		○メドレーから1曲を選びグループを作って踊る。 ○自分たちでダンスを創作し、工夫できるところを教え合う。 ○グループごとに活動し、互いの動きを高め合う。	○ゲストティーチャーを招き自分たちのリズムダンスを発表する。
25			○発表会を行う。 ○よい動きをしていたグループを紹介し、踊りのポイントを確認する。		
45	○記録・感想発表。		○感想発表。 ○学習の振り返り。		

(2) 「習得ー活用ー探求」のつながり

単元の導入にあたって、まず初めに児童の恥ずかしいという思いを取り除くため、ゲストティーチャーを招いてダンスレッスンをしたり、体ほぐしの運動を取り入れたりした。児童は「これから体を動かして踊ろう」という気持ちを高めていくようになり、徐々に踊ることへの抵抗感も薄めていった。第2時ではダンスレッスンで覚えた振り付けや運動会のリズム体操の動きを確認し、写真に取り込みながら動きの蓄積を行った。これらの動きをもとに、「体のくずし」「リズムのくずし」を入れて新しい動きを考えようと声をかけたところ、次々と新たな動きが発表され、動きが蓄積されていった。第3時では児童が選曲したいろいろなリズムの曲をつなぎ合わせ、リズムに合わせて連続で踊る活動を楽しんだ。いろいろな曲調の曲に合わせて動きやリズムの取り方を工夫して踊ったり、友達と調子を合わせて自由にかかわり合って踊ったりする様子が見られた。また、いろいろな動きをつなげながら楽しそうに踊る様子が見られた。このころになると、わざと友達と反対の動きを試みたり、一個所にとどまらず自由に動き回る児童も見られてきた。意欲が高まるにつれ、児童から自然と一つの曲で最後まで踊りたいという声が出てきた。お気に入りの曲ごとにダンスグループが誕生し、グループの仲間で踊り方を示しながら振り付けを決める様子が見られた。また、活動が進行する中で

中心的な役割を担う児童が出てきて、そのリーダーを中心に活動を行い、ダンスの質も高まるなど、ダンスグループとしての素地を作り上げていった。活動の終末ではどのグループも自分たちで考えた動きをより高めようと努力していた。踊りの効果を高めるため、道具や楽器の使用を申し出るグループもあるなど、工夫して活動する姿が見られた。最終目標であるダンスパーティーを意識させながら中間発表の場を設け、お互いを見合うことで、子どもたちはより真剣に動き方や合わせ方を確認するなどグループとしてのまとまりを高めていた。

### (3) 抽出児の動きの分析

	性別	ダンスチーム	運動態度・技能	事前アンケート	その他の実態
A児	女児	ドリームランド	積極的・運動技能高い	楽しみ	協調性はあまりなく、グループ活動が苦手である。自分勝手な考え方をしてもめれることも。
B児	女児	ドリームランド	消極的・運動技能高い	少し恥ずかしいけどやや楽しみ	技能、思考判断レベルとも高いが先頭には立たない。協調性は高い。
C児	女児	ドリームランド	消極的・運動技能低い	やりたくない	恥ずかしさを最初からかなり感じている。協調性は高い。
D児	男児	ロコローション	積極的・運動技能高い	楽しみ	技能、思考判断レベルとも高い。進んで意見を言う。協調性は高い。
E児	男児	ロコローション	積極的・運動技能高い	やりたくない	走運動、ボール運動が得意。グループ活動より個人競技を好む。
F児	男児	ロコローション	消極的・運動技能低い	やりたくない	技能系の運動は苦手。独創性がある。

B児は事前のアンケートで、「ダンスは少し恥ずかしい」と答えていた。2、3時のめあて1「いろいろな曲のリズムによって楽しく踊りながら自分の表現を探す」の活動では仲の良い友達の踊りを見ながら自分なりの動きを創る姿が見られた。また、めあて2「1つの曲でグループで創作したダンスを楽しむ」活動では自分で踊りを提案することはなかったが、友達の考えた動きを積極的にまねて自分の動きにつなげることができた。導入の体ほぐしの運動も進んで仲間とふれあおうとする姿が見られた。

事前アンケートでリズムダンスに消極的だったE児は第1時のゲストティーチャーと踊る活動では、初めは照れがあり大きな動きができなかった。しかし、次から次へいろいろなダンスが進む中で心の開放が見られ、笑顔で踊る姿が見られた。「リズムに乗って楽しくできた。こんにやく（の動き）が楽しかった」と感想を述べていた。F児はグループでダンスを創作する活動では、友達から提案した動きを積極的に模倣していた。いろいろな動きを組み合わせることをグループに提案するなど独創的な考えを示していた。

ドリームランドを選曲したグループは初めはダンスのイメージがわからず、活動が停滞する様子が見られた。しかし、人前に出ることがそれほど得意ではないC児が積極的に動きを示すなど、リーダーとしての役割を次第に果たすようになった。C児のアイデアから他の児童も意見が広がるようになり、いろいろな動きを組み合わせたダンスを創作することができた。

私は体育の勉強でリズムダンスをしました。最初はちょっとは恥ずかしいなと思っていただけ、やっているうちにそんなには恥ずかしくなくなりました。（中略）曲を決めるとき私はどの曲で踊るか迷いました。決めたのはドリームランドです。聞いたときはちょっと早いかと思ったけど踊ってみたいいなと思ったからです。（中略）発表会は一番最初でドキドキしました。ちょっぴり失敗しちゃったけど良かったです。でもとても楽しかったです。他のグループも上手にできていました。本当に楽しかったです。（B児）

ぼくたちのチームは最初チームワークが合わなかったけどだんだん慣れてよくなりました。踊りはむずかしかったけどだめなのを変えたり、指示を出したりしてよくなりました。（中略）発表会では最初のチームはとてもきれいな踊りでぼくたちもまねしたいと思いました。（中略）チームワークのいいグループのK君が失敗しました。でも気にしないで踊っていました。ぼくは失敗しても気にしないK君がすごいなと思いました。（D児）

## 6 考察

### (1) 研究内容1について

今回、それぞれの学習内容を整理し、学習活動を系統立てたことで、それぞれの場面における児童の活動や思考の流れが的確に把握できた。また、ダンス作りの基礎となる動きを蓄積する活動場面では教え込みにならないよう、体のくずしのポイントを示しながら、児童から動きを出させるよう工夫した。児童は自分たちが創作した動きがグループのダンスにつながることに喜びを見出していた。学習の後半は「踊る－創る－見合う」児童相互のかかわりの活動が中心であった。この活動はいろいろな動きをいろいろな場所で派生させ、それぞれ持ち寄った動きが合わさり新しい動きが生まれるなど大きな効果が見られた。また、グループ内や他のグループからの意見をお互い大事にし、それぞれの子どもたちが自分やグループの表現を高めようと取り入れる動きも見られた。一人一人の動きを共有できたことが「学びの深まり」へとつながっていったと考えられる。

### (2) 研究内容2について

好きな曲に分かれての最終練習の時間で、どのグループも自分たちで考えた動きををより高めようと努力していた。踊りの効果を高めるため、道具や楽器の使用を申し出るグループもあるなど、工夫して活動する姿が見られた。中間発表の場を設け、最終目標であるダンスパーティーを意識した活動を取り入れた。そのことにより、子どもたちはより真剣に動き方や合わせ方を確認するなどグループとしてのまとまりを見せていた。

B児は事前のアンケートでは「楽しみだけど恥ずかしい」という理由でリズムダンスの学習は積極的ではなかった。しかし、導入のダンスレッスンで基本的な動きを覚え、楽しく踊れたことでダンスに対する印象が変化していった。動き作りを蓄積する活動では、くずしを入れることで動きのバリエーションが広がることに気付き、進んで体やリズムのくずしを取り入れた新しい動きを発表した。また、好きな曲でのダンスもいろいろな動きを取り入れるなど積極的に活用する様子が見られた。B児はその後、終末のグループ活動のリーダーとなり、対称性のある動きを提示したり、集合離散を繰り返す動きを取り入れたりするなど、より高まりのある活動を考えていた。技能の習得とその活用を繰り返しながら楽しみながら踊ったことで、踊りの幅が広がり、それが高まりのある探求活動に結び付いたと考える。

コミュニケーションを活発にする手立てについては、学習の形態として学習当初から一定の形式にこだわることなくグループを流動的に構成していったことでいろいろな仲間と活動を組むことができた。このことが、いろいろな動きを学び合い、ダンスの創作につながったといえる。また、単元の初めにゲストティーチャーを招き、子どもに自由に踊る楽しさを味わわせることができたことは、その後の活動を行う上で有効であった。なぜなら、子どもに踊る楽しさを感じ取らせたと同時に自分たちでもいろいろな動きを作ることができるというリズムダンスのねらいを持つことができたからである。活動のゴールとして「ダンスパーティー」という明確な目標を持たせたことで、どのグループも最後まで集中して練習に取り組むことができた。導入時に行った体ほぐしの運動も意欲面、技能面の向上に有効であった。

## 7 成果と課題

本実践はリズムダンスの学習を新学習指導要領のポイントの一つである「習得－活用－探求」型の学習スタイルで取り組んだものである。それぞれの学習内容をねらいに基付いて整理、指導計画を立案し、学習を進めたところ、リズムダンスのような表現運動の創作活動においては習得した技能を活用する学習と活動の練り上げを目的とする探求型の学習は深く結び付き、お互いが相互に関連し合っていることが明らかになった。今後は本実践の成果を生かしつつ、「習得－活用－探求」型の学習スタイルの内容に表現力を育成するための方策にも触れ、考えていきたい。

本単元では「習得－活用－探求」型の学習スタイルの有効性をリズムダンスの活動において明らかにしたが、体育の他の領域においても「習得－活用－探求」型の学習スタイルは有効かどうか探りたい。身に付けた能力を活用し、そこから課題を見付け解決する学習スタイルはボール運動などの活動でその種目特性から考えても有効であろう。他の運動領域についても今後、さらなる実践をとおして明らかにしていきたい。

## 8 引用・参考文献

- 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 総則編」 2008.8  
 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 体育編」 2008.8  
 藤崎 敬・後藤一彦編著 「小学校体育楽しい②学習カード」 東洋館出版社 2002  
 村田芳子 「ダンスの授業はここが楽しい」 体育科教育 大修館書店 2005.10  
 渡邊浩幸 「初めてリズムダンスの授業をする先生へ」 体育科教育 大修館書店 2005